



Title	<書評> Michael Keating, "The New Regionalism in Western Europe : Territorial Restructuring and Political Change", E.Elgar (1998)
Author(s)	小浜, 雅史
Citation	年報人間科学. 2004, 25, p. 219-224
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/6811">https://doi.org/10.18910/6811</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

Michael Keating

*The New Regionalism in Western Europe: Territorial  
Restructuring and Political Change*

E. Elgar (1998)

小 浜 雅 史

一般に、グローバル化の進展により普遍主義 (universalism) の拡大が起るといわれている。しかしながら、これは同質性を意味するのではない。グローバル化は時に、ローカル化を伴うものであり、例えば各々のローカルな場に適合するようにグローバル化が土着のものと重なり合っていくことがある。つまり、グローバル化における諸現象は、不可避免的に地域的なものと結びついて現れているのである。また、今日においては地域 (region) が他の地域と交流をもつなど、国家の枠組みを超えた活動・現象が顕著にみられるようになった。これは、これまでの国家を基盤にした政治・経済・社会的活動から脱却し国家以外の領域が基盤となるような脱中心化 (decentralization) が起こっていることをも含意している。一例を挙げるなら、一九七〇年代以降の経済のグローバル化や資本の移動が増加するにつれ、国内では雇用問題をはじめとする新たな経済的不平等が生じたことを考えてみよう。グローバル化のもとの一連の問題は、伝統的な国家による介入策では対処できなくなったのである。問題解決のために、経済・社会変動の責務は国家から地域・ローカルな場などのトランスナショナルなレヴェルやサブナショナルなレヴェルへと移った。つまり、国家による経済的管理能力の限界により、人々は国家について再考することで地域の重要性を認識するようになったと考えられる。これによって、グローバル化についての研究では、国家とサブナショナルなレヴェルとのつながりが強くなってきたといえる。

問題点を整理すると、次のようになる。国家による意思決定のみ

では解決できないさまざまな問題に直面するなかで、国家以外の政治的アクター、とりわけ地域がこれからのような役割を果たすのか、ということ。そしてその地域の性格や定義をこのコンテキストでどう捉えなおしたらよいか、ということがそれである。この問題設定と議論の展開のもとで、新たな概念に依拠して別の観点から地域を見出せるし、またそれとの関連で国家もガヴァナンスのアクターとしての役割に変化が見られるようになるのではないかと考える。

本書は、西ヨーロッパを中心にEUのもとで展開されるリージョナル化のもとでどのような変化が起こっているかに目を向けている。本書に触れる前に、リージョナル化について議論を俯瞰しながら本書の位置づけを考えてみたい。多くのリージョナリズム研究は、本書のように地域の対外関係との関連で語られるため、EUがメイントピックとなる傾向がある。そのアプローチはいくつか考えられるが、主要なものとして二つの方向性がある。一つ目が、本書の著者Keatingのように、トランスナショナルな地域が関係をもつことで国民国家の枠にとられない自由な活動が可能となり国家の機能再考を求める「新しいリージョナリズム」(New Regionalism)を唱える立場である。二つ目が、\*Bate Kohler-Kochのように、ヨーロッパのリージョナル化のなかでEUそのものの機能が多元的な政治システムであるとのみなし、EUのガヴァナンスに注目する立場である。また、この二つの分析方法以外にも、EU圏の地域間の移動(Mobilization)に焦点を当てた研究などがあるが、これらのうちどれが優れたアプローチであるかは断言できない。しかし、少なく

とも、ヨーロッパのリージョナリズム研究において地域の動きとその属している国家の動きとを同時に観察・分析することを考慮するなら、Keatingの議論が最も示唆に富んだものであるといえる。

まず、手短に著者の紹介をしておこう。本著者Michael Keating(一九五〇～)は、ヨーロッパの比較政治学・都市と地域の研究・ナシヨナリズム研究を専門にしている。一九七五年にスコットランド・グラスゴー工科大学(現グラスゴー・カレドニア大学)で政治学のPhDを取得後、エセックス大学(七五～七六)をはじめイングランド・ノーススタンフォードシャー工芸大学(七六～七九)やスコットランド・ストラスカイド大学(七九～八八)で講師を担当し、一九八八年から一九九年までカナダ・ウエスタンオンタリオ大学で政治学の教授を勤める傍ら、アメリカ・イギリス・フランス・スペイン・ノルウェーで講義を行っている。現在は、EUI(European University Institute)の政治・社会科学教授やヨーロッパ憲法制定会議の地域委員会顧問さらに中央地域研究の共編を行うなど精力的に活動している。なおここで取り上げた本以外にも、“*State and Regional Nationalism*”(1988, Harvester-Wheatsheaf)や“*Comparative Urban Politics*”(1991, Edward Elgar)など多数の著書を執筆している。

さて、本書の構成は、まず領土をもとにした政治が昨今では揺らぎが見えはじめていることを指摘し、本書全体に通底する問題を提起する(第一章)。次に国家と地域との関係を動的に捉え(第二章)、著者が唱える「新しいリージョナリズム」の到来を各国の事例とと

もに追っていく(第三章)。そして、その「新しいリージョナリズム」の定義・特徴をまとめ(第四章)、その動きのなかでの地域のガヴァナンスの機能を政治的・経済的側面それぞれから論じ(第五章・第六章)、さらに地域とヨーロッパ全体とのかかわりについて言及する(第七章)。結論では、全体のまとめを通じて地域研究の重要性を再び説いている(第八章)。

まず、Keatinge は領土を政治的側面において根源的なものと定義づけたうえで、これまでの領土は国家権威システムを支えてきたこと、そしてそのような空間的なつながりのもとで相互コミュニケーションが行われモノ・労働・市場へのアクセスが容易になってきたことを示す。このように論じて、彼は今日のグローバル化の進んだなかでの領土的政治(つまり国家による国境にもとづいた政治)はもはや終わりにあるのか、という問題提起を行う。

結論から言うと、領土的政治は終焉化ないし弱体化に向かっていくのではなく、むしろ新たな強力な形態に再構成されていることを著者は強調する。それこそがまさに、新しいリージョナリズムの到来を意味しているのである。

では、その新しいリージョナリズムとは何か。本書の論点を追いつながら考えてみたい。

その論点は四つほどあると思われる。しかも、それらは単に独立した特徴ではなく、相互に関連しあいながら新しいリージョナリズムへの論拠となっているといえる。まず一つ目は、現在起きているリージョナリズムをまったく新しい現象としては捉えていない、と

いうことである。つまり、この新しいリージョナリズムはヨーロッパの歴史から見ると、センセーショナルな出来事とはいえないのである。というのは、これまでの長い歴史のなかで領土そのものの意味が不断に再定義され、国家が存続してきたからである。また、中世的秩序をもったギルドをはじめとする自治都市が存在していたことも見逃せない。このことから国家の形態は近代的なものであり、偶発的・一時的なものといえる。その意味でも、新しいリージョナリズムのもとでの領土的政治は、何らかの変化が要請されているのである。

その流れで二つ目の特徴として挙げるのは、国家の機能は消滅もしくは軽減するのではない、ということである。経済的変化や地域内での政治的ダイナミズムによって、新しいリージョナリズムの動きが起こったとしても、やはり今日においても国家は権力・資源を多大に有しており、国家は弱体化するのではなく地域の台頭とともに自らの役割を再編成していくのである。それまでの国家というのは、厳密に定められた国境のなかで国内の各行政当局が問題解決に取り組んできた。それがリージョナリズムにおいては、各国政府間や政府の代表間で自国の政策決定を行うなど相互依存的な性格を帯びるようになるのである。

そして三つ目は、リージョナリズムによって「地域—国家—ヨーロッパ(国際レジーム・市場・EUなどを含む)」という三つのガヴァナンスが存在する、ということである。とりわけ、この点は本書の立場として最も重要なところだと思われる。この構図は、地域

とヨーロッパとの結びつきを国家が担うということや、地域の意見を国家にむけて発信しさらにそこからヨーロッパへといたるような縦割りのヒエラルキー的なシステムを意味するものではない。そうではなく、地域の見解が直接に（国家を介さないで）国際機関に反映されたり、また国家の政策にEUが干渉したりある地域が影響を与えたりするように、「地域—国家—ヨーロッパ」の三者が（どれが上位にありどれが下位に属するか全く関係なく）互いに密接に関わりを持っていることを著者は述べている。

これとの関連で四つ目の特徴は、リージョナル化のもとの現象は多様であり一般化できない、というものである。ヨーロッパの様々な地域で複合的な影響の下で地域が形成されているため、それぞれが独自性を帯びており体系的な理論や比較（例えばアジア圏とヨーロッパ圏のリージョナル化の違いを考察すること）はおおよそ不可能に近いと著者はみている。確かに前述したようにヨーロッパのリージョナル化は、「地域—国家—ヨーロッパ」の三者の相互浸透作用であるが、その具合は各地域によって異なっているようである。例えば、スペインのバスク地方は国家の枠組みを必要としておらずEUのなかで一定程度独立を求めてきていたり、そしてドイツ国内では各地域に領土の断絶がみられ、地域ごとにナショナルリズムの機運が高まりドイツの国民から独立した新たな国家モデル（KeatingはこれをRegional Stateと呼んでいる）を構想している。また、フランドル地方では単一通貨により発生した失業・多額債務などの社会問題を国家が統括する能力がないとみて、EUに直接かつ積極的

に政策立案を求めていたり、さらにはポーランド国内では西側地域がEUとのつながりをもとめており、一方の東側地域では保護貿易政策を求めており両者のパワーバランスが拮抗しているのである。ここでさらに重要なことに気づくかもしれない。それは、ただ一口に地域といっても、その定義も実に多様であるということである。地域は国家の最小構成単位という政治的・行政的なものだけではなく、国家の枠組みさえ無視した民族的・言語的・歴史的・社会的・文化的・習慣的つながりのもとの単位としても成立しているのである。以上の事例から、リージョナル化の多様性を垣間見ることができた。

このように、地域の重要性はグローバル化の過程において、これまでの国家を基盤にした領土的政治から「地域—国家—ヨーロッパ」の相互依存的な結びつきによる脱中心的な政治への移行のうちにみられる。だが、「新しいリージョナリズム」は単に地域レヴェルのものが重要になってきたことのみを指してはいない。それは同時にEUのようなトランスナショナルなレヴェルと、何より国家の役割にも注目する必要がある。リージョナル化によって国家は重要性を失うのではなく、当分の間なお不可欠な存在であり続ける。だが、そのために国家は自らの機能・役割を再構築するよう迫られているのも事実なのである。これまで国家は地域の上位システムとして機能してきたが、今日の状況下では国家の決定に国際レジームだけでなく地域が影響を与えるまでになっている。換言すると、国家は地域の上位にもまた下位にも位置するのではなく、それぞれが相互に

対等な位置にありそれぞれが相互にまったく無視できない位置にあるといえる。また、国家と同様に地域それ自体もその性格が多様化していることも重要なことであろう。それは、行政的な枠組みとしての性質を持つということだけでなく、民族的・文化的レヴェルでの結合を基盤とした地域が政治的な文脈のもとで見逃すことのできない役割を担うようになっていくということにも注意を払う必要がある。その意味でも、確かに、この「新しいリージョナリズム」は地域の重要性、そして再編される国家の重要性とさらに両者のつながりをも同時に認識させてくれるのである。

【注】

\*例えば、Jachtenfuchs, Markus, und Kohler-Koch, Beate. (Hrsg.), 1996, *Europäische Integration*, Leske + Budrich を参照された。

